
箱入り息子【未成人、現ル現ル】《昔話編》

天城 百於馨

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

箱入り息子【未成人、現ル現ル】《昔話編》

【Nコード】

N7980B

【作者名】

天城 百於馨

【あらすじ】

ある日納屋からおぎゃあおぎゃああと泣き声がし、ばあさんが戸を開けると……（続きは本編で）

(前書き)

初の短編でしかも昔話！？シユールな昔話をどうぞ御覧くださいませ
せゝゝ(ゝゝゝゝ)

むか〜しむかし、ある村に普通のじいさんとばあさんが住んでおったそうなの。

じいさんは、ばあさんのことを『なあなあなあ』と呼び、ばあさんは、じいさんのことを『おいおいおい』と呼んでおった。

毎朝ばあさんは山へ薪を取りに行き、じいさんは川で洗濯をしていたそうなの。

ある日のことだった。いつも二ワトリが鳴くより早く目を覚ますばあさんが、納屋のほうから『おぎゃあおぎゃあ』という泣き声を聞き付けた。戸を開けると、中にはたまのようにかわいらしい赤子がおったそうなの。驚いたばあさんは急いでじいさんを叩き起こすと納屋まで連れて行った。

「じいさんや、見ておくれ。これは天からの授かりもんじゃ〜」
赤子を抱き上げて嬉しそうにばあさんは言った。

「まったくお前は物事を良いほうに考えるのう。大したもんだあ」
じいさんは言った。

「気の優しい人が置いてったんかのお」
ばあさんは赤子を高い高いと持ち上げた。

「気が優しい人は置いてかんじゃろ〜」
「そうか〜じゃあ捨て子じゃのお」

ばあさんはしぼんで垂れ下がった乳を赤子に無理やり飲ませようとした。

「おぎゃあ〜っ!」
すると赤子は嫌がって泣き出した。

「そうじゃあ、お前は納屋から出てきたももろっじゃ(？)わしの名前の吉とくっ付けてお前の名前はモ吉にしよう〜と名付けたそうなの。

それからモ吉はすくすくと育ち、村一番相撲が強いわらしになった。

「モ吉や、次は絶対負けられんぞ〜」

じいさんは豹変し、モ吉が相撲で取ってきた賞金でバクチを始めようになっていた。

「分かったぞ〜」

モ吉は素直な良い子だったのでじいさんの言つとおり、相撲を取りに行つておつた。

「次が本番じゃ〜負けたら破産するんじゃぞ〜」

じいさんはそう言つて町でバクチに銭を注ぎ込んでおつたそう。

「じいさんや、いい加減目を覚ますんじゃ〜」

ばあさんはそんなじいさんをしかつておつた。

「うるさいのお、わしゃあ老い先短いんじゃ〜」

じいさんは聞く耳を持たんかつた。

「そう言つて、なかなか死なないんじゃ〜」

ばあさんが言つた。

じいさんは他人に厳しく自分に甘かつたので、モ吉の相撲の稽古は狂人的だつた。

「わしゃあ、お前に人生捧げたんじゃあ」

そう言つてモ吉を追い詰めておつた。

「分かつたぞ〜」

モ吉は過酷な稽古もがんばつた。

熊と相撲を取つたり、じいさんとばあさんをおぶつて山へ茸狩りに行つたり、海女さんより長く海に潜つたり……じいさんが言つてもでもやりこなしておつたそう。

そんなモ吉の姿を見てばあさんは関心しとつたが、じいさんのほうは悪びれもせず相変わらばバクチばかりしとつた。

ある晩飯の時だった。じいさんはガツガツ飯を食って
「もつと飯を食わせろ〜！ ぐほっ！」
喉につまらせた。

「おらぁもう年だ。これ以上働けねえ。もう飯食うな〜」
ばあさんは悲しんでそう言った。

「ぐぶっ！」

「おつかあ、おつとが死にそうじゃ〜!？」

モ吉は心配そうにじいさんを見ておった。

「茶を飲むんじゃ〜」

「ぐほっ……………」

茶を飲むとじいさんはまたむせた。

それからはあさんがじいさんの背中をさすってやるとやっとい
さんは良くなった。

「悪いことだからバチがあたつたんじゃ〜」

ばあさんは言った。

「そうじゃ〜」

モ吉も言った。

「ばあさんや〜すまんかったあ……………」

じいさんが謝るのは数年ぶりだった。

ある日モ吉の噂を聞き付け、一人の頑強そうな眉をした侍が尋ね
て来た。

「お主の相手はこの村にはもうおらぬ。城に来い」

侍はそう言った。

「お侍さま〜おらぁ、この村から離れたくねえ。断るぞ〜」

モ吉がそう返すと

「ならば……」

侍は刀を鞘から抜き、モ吉に向かって振り下ろそうとした。

「待ってくださいええ！お侍さま！代わりにわしが！」

慌ててじいさんが叫ぶと侍は動きを止め、じいさんの顔を見詰めた。

「……」

じいさんがほっとすると

「いざっ！」

再び侍が刀を振り下ろそうとする。

「なら、ばあさんが！」

侍が動きを止め、じいさんの顔を見詰めた。

「……」

じいさんはほっとすると

「いざっ！」

再び侍が刀を振り下ろそうとする。

「待ってくださいええ！」

今度はモ吉が叫び侍は動きを止めた。

「やっぱりおら、お城に行きます！おらが死んだら、おっとうも

おっかあも飯が食えなくて死んでしまいます」

「ならば、付いて来い」

こうしてモ吉はお城へと行くことになったそうなの。

侍と徒歩で半日ばかり、とうとうモ吉はお城へやって来た。

「良いかお主。殿が言うことは絶対だ。決して『いいえ』を言っ

はならぬぞ。分かったな」

「へえ、お侍さま」

そして、モ吉は殿と対面することになった。

「お主が村一番相撲が強いモ吉か？」

殿が尋ねた。

「へえ、そうでご座います」

モ吉が答えた。

「年は何歳じゃ」

「おらあ、捨て子なんで年がよくわかりません」

「捨て子？」

すると殿は何か企んだ。

「それならお主、誠の親に会いとうないか？ いや、会いたいだろ
う」

そう言い殿はにやつと笑った。

「『いいえ』と言ったらどうなるか……分かっておるな？」

「……」

「後ろを見よ」

モ吉が後ろを見るとさっきの侍が刀を用意しておった。

「お侍さま」

「……」

モ吉は成す術を無くしておった。

「そうじゃあ」

するとモ吉はひらめいた。

「それなら相撲で決めましょ～おらが相撲で負けたら返事を言いま
すだあ」

「何い～～ずる賢い奴めええ～～」

殿は歌舞伎のように見得をきった。

「そこまで言うのならお主、二言は無いな」

「へえ、お殿さま。おらあ言い訳が嫌いでご座います」

「ならばモ吉。例えどんな相手だろつと文句は言わせぬぞ」

余裕たっぷりに殿は言った。

「へえ、お殿さま」

モ吉は了解した。すると殿はさっきの侍を呼び何やら耳打ちしたそうなの。

「そのほう頼んだぞ」

殿の命令を受け、さっきの侍はモ吉をどこかへ連れて行った。

それから歩いて間もなく、やって来たのは森の中だった。

「お主の相手はあの大木だ」

侍が指差したのは大木のごとくがっしりとした体格の人間ではなく、どう見ても本物の大木だった。

「お侍さま」

思わずモ吉は叫んだ。

「どうしたモ吉。怖じ気付いたか」

「そうではござえませぬ。こいつは人間じゃねえ、ただの大木です。こいつとどうやって相撲を取ればいいんですか」

すると侍はこう言ったそうなの。

「お主は強すぎて人間の相手はもうおらぬ。せめてお主の力がどれほどかを知るにはもはやこの大木しかない。これを倒すか引っこ抜き、その力がどれほどかを殿が見たいとおっしゃった」

「そんなあ」

モ吉は再び窮地に立たされた。

「拙者が見張つておる。早くしろ」

そう言い侍は腕組みをしてそこで監視を始めた。

その大木はびくともせず、とうとう日が暮れた。そしてモ吉はどつがんばつてもその大木を動かせなかったそうなの。

「時間切れた。城に帰るぞ」

「そんな」

「無理なものは無理だ。諦める」
仕方なくモ吉は諦め、侍と共に城へと戻って行った。

城へ戻るとさっそく侍は殿に報告した。

「なんてこつてえ」

モ吉はがつくりと肩を落とした。

「話は聞いた。お主、誠の親に会いたいな？」

殿はにやつと笑った。

「へ、へえ〜お殿さま〜」

モ吉は涙ながらに返事した。

そして幾日か経ち、とうとうモ吉の親が見付かった。

そしてあの侍がモ吉の家に知らせに来ると同時に連れに来た。

「おつとう、おつかあ、おら行って来る」

モ吉は行きたくなかったので悲しそうに言った。

「達者でな」

「ばあさんが言った。」

「二度と戻って来るんでねえぞ」

「じいさんが言った。」

「参るぞ」

「へえ」

こうしてモ吉は侍とまた徒歩で歩いて行った。

それから歩いて半日ばかり、やって来たのは町の片隅にある小さな木の家だった。

「ごめん！」

侍が戸を叩いた。

「あいよ〜！」

そう言い中から女が出て来た。

「お主の息子を連れて来た」

「ありや〜」

女は驚いた。

「おっかあ」

モ吉が言った。

「おめえがおらの息子か？」

「そつだぞ」

すると侍は

「拙者はこれで失敬する」

そう言い去って行った。

「さあ、中へ入んな」

モ吉は家の中に入った。

「おっかあ、おつとうはどこだ」

「おつとうは薬売りに行つて晩飯まで帰らないよ」

それからその晩飯時。その旦那が家に戻ると三人仲良く団欒した。

「あれ？」

ふと母の顔を見てモ吉は不思議な顔で言った。

「何だいモ吉」

母が言った。

「何でもねえ」

モ吉が言つと三人は再び飯を食い始めた。

飯の後母が怖い顔でモ吉に言った。

「おらが風呂に入る時は絶対、部屋から出るんでねえぞ」

「分かつたぞ」

モ吉は素直に返事した。

それから母が外にある風呂に向かい、父が火を起こしに出ようとした時

「おつとつ、待ってくれ！」

モ吉が引き止めた。

「何だモ吉」

すると父が立ち止まり振り向いた。

「おつとつ、あれは本物のおつかあじゃねえ。口の回りから毛が伸びてたぞ。あれはきつと妖怪だぞ！」

モ吉は震えながらそう言った。

「なら、おらが確かめて来る。おめえは絶対部屋から出るんでねえぞ」

父はそう言い残し部屋から出て行った。

「おつとつ」

それから父は戻つて来るとモ吉に何も言わず、そのままいびきをかいて寝てしまったそうなの。

それから毎晩モ吉は悪夢にうなされるようになった。それはモ吉が風呂場の前に行き

「おっかあ、おらが背中流してやるぞ
そう尋ねると

「来るなと言ったのに」

中から母の低い声がし

「この嘘つきめ！」

突然勢いよく戸が開き中から全裸の母が姿を現し、それを見たモ吉は叫んで目を覚ますというものだった。

「ぎゃああああ！」

またモ吉が悪夢にうなされると心配して父が言った。

「おめえ毎晩どんな夢見てそんなにうなされとる
するとモ吉は答えた。

「おっかあが出て来る夢だぞ」

「おっかあが出て来て何で叫ぶんじゃ」

「おっかあが風呂場から出て来たら髭面のおっちゃんになってるんだぞ」

翌日、いつもより早く家に帰って来た父がモ吉に言った。

「おめえに大事な話がある」

「分かったぞ」

モ吉は素直に返事した。

「おめえのおっかあはなあ」

父はそこで一旦言葉を区切り深く息を吸い、ゆっくり吐いた。
そしてこう言ったそうな。

「おっちゃんなんじゃ」

「……」

モ吉は言葉を失った。

翌日モ吉は家を飛び出し、恐怖で二度とその家には帰れなかった
そうな。

一方、モ吉が共に暮らしたあのじいさんとはあさんはという
あれからじいさんはバクチをやめ真面目に働くようになり、ばあ
さんと仲良く暮らしたそうな。

めでたし、めでたし。

箱入り息子【未完成人、現ル現ル】《昔話編》

(後書き)

読んでくださった方々どうもありがとうございます。感想、評価などよろしく願います。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7980b/>

箱入り息子【未成人、現ル現ル】《昔話編》

2009年7月3日19時04分発行